

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531121

研究課題名(和文) 地域社会とかかわりながら造形と表現を学ぶ学生参加型美術教育プログラムの実践と評価

研究課題名(英文) Implementation and evaluation of a student participatory fine-arts educational program to study modelling and expression while developing relations with the local community.

研究代表者

五明 真 (GOMYO, MAKOTO)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80362747

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、美術教育とまちづくり教育を融合し、教室からまちに出て、地域社会と関わりながら造形と表現を学ぶ学生参加型美術教育プログラムの実践と評価を行った。

1. 美術系大学における学生の実践活動にみる課題検討として、学生による美術プロジェクトを視察した。2. 社会と関わりながら学ぶ美術教育プログラムの開発と実践として、民俗行事「『つくりもん』の立体制作活動」と、店舗のシャッターに絵を描く「シャッターアート活動」を行なった。3. 「シャッターアート活動」については、店主のヒアリングや地域住民のアンケート調査を通じて活動の評価を検証した。さらに活動報告パンフレットを毎年作成し地域に発信した。

研究成果の概要(英文)：In this research, we united fine-arts education and town planning education. We conducted and evaluated a student participatory fine-arts educational program in which the students went out of the classroom into town and studied modeling and expression, while developing relations with the local community.

1. We inspected fine-arts projects carried out by students in order to examine issues related to practice activities of students at a fine-arts university. 2. As development and implementation of the fine-arts educational program for students to study while building a relationship with the local society, "Solid work activity of tukurimon (a folk-customs event)" and "Shutter art activity", in which students painted pictures on shutters of stores, were performed. 3. We verified the evaluation of "Shutter art activity" through hearings with store owners and questionnaires with local residents. We also issued and sent out an activity report pamphlet every year to the locality.

研究分野：美術教育・造形表現

キーワード：美術教育 造形表現 地域連携 学生参加 実践活動

### 1. 研究開始当初の背景

これまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯は次の通りである。

(1) 研究代表者(五明)は造形教育と表現研究を専門にし、教育学部で美術教育に携わってきた。造形教育とは、造形を通して世界を知る手段を身につけることである。表現研究とはそれによって生み出される作品の深化と、表現とは何かを問いつづけるものである。美術教育においては、自身の表現の現状が、その目指すところと、どれほどの相違があるものか認識するために、客観的視点の育成が重要である。その一つの手段として、個として発信するものが、他者にどのように受け取られるか、それを知ることが効果的である。美術専攻の学生にとって、自身の表現から導き出される絵やデザインが大学の授業内で収まるのではなく、まちに出て活動し、表現を通じた地域の人々との触れ合いが、社会性と客観的視点を育む場となる。表現を扱う美術教育の現場においては、表現と社会性について学ぶ機会とその環境づくりが必要不可欠といえる。

(2) 一方、研究分担者(碓田)は住居学の立場から、科学研究費補助金によって、従来から地域の伝統文化を活かしたまちづくり研究、および市民や子ども向けの住まい・まちづくり学習の実践研究に取り組んできた。これらの研究活動では、地域社会との結びつきが非常に強いこと、市民や子どもを対象としたワークショップの実施が特色である。ワークショップでは、地域を見直すために参加者でまちを探検して、その現状を絵に描く、住みたいまちや建物の模型を立体で制作する、アート作品をまちに展示するなどの点で美術表現や造形デザインが大きく関わっており、美術教育との連携の必要性を痛感していた。

(3) そこで研究代表者と分担者は、互いの専門性を融合させた教育活動として、地域社会と関わりながら造形と表現を学ぶ学生参加型の美術教育プログラムを、まず大阪教育大学の学生チャレンジプロジェクト(2008年)および地域貢献事業(2009年~2011年)の中で、大阪教育大学周辺地域でのシャッターアートの制作活動など、美術専攻学生が実践活動を行える教育プログラムを4年間に渡って試行してきた。さらに、学術振興会「ひらめきときめきサイエンス~ようこそ大学の研究室へ~」事業(2009・2010年度)、大阪市立住まいのミュージアムの企画展示活動(2007年)の中でも、美術専攻学生の活動の場を創出してきた。これらの実践活動に対しては参加した学生の評価が非常に高いことなどを、「美術科研究」(大阪教育大学美術教育講座・芸術講座)、「生活文化研究」(大阪教育大学家政学研究会)、日本建築学会大会などで発表している。

### 2. 研究の目的

本研究では、これまでの予備的研究成果を発展させ、美術教育と地域社会と関わりの深いまちづくり教育を融合し、教室からまちに出て、地域社会とかわりながら造形と表現を学ぶ学生参加型美術教育プログラムの実践と評価を目的としている。以上の目的のもとに、次の3つの課題に取り組んだ。

(1) 美術系大学における学生参加型実践教育活動にみる課題検討。

(2) 社会とかわりながら学ぶ美術教育プログラムの開発と実践。

(3) 実践した学生参加型美術教育プログラムの検証。

### 3. 研究の方法

(1) 美術系大学における学生参加型実践教育活動にみる課題検討。他大学の美術専攻の学生が、大学のプロジェクトや授業の中で、美術の専門性を活かして活動等に参加している事例を収集し、その課題を検討する。また、実際に活動の現場を視察し、聞き取り調査を通して総体的に課題把握を行う。

(2) 社会とかわりながら学ぶ美術教育プログラムの開発と実践。学生が地域で活動する実践教育プログラムとして、大学周辺地域を対象に、「『つくりもん』の立体制作活動」と、「シャッターアート制作活動」を実施し、そのプログラムの教材化を行う。

(3) 実践した学生参加型美術教育プログラムの検証。活動に触れる地域住民を対象にアンケート調査を行い、学生主体で実践活動の成果報告パンフレットを作成できるように指導し、アンケート調査結果や、実践活動の記録をまとめ、活動紹介として地域に配布して情報を発信する。そして、過去にシャッターアートを描いた店舗の店主に対してヒアリング調査を実施する。

### 4. 研究成果

(1) 美術系大学における学生参加型実践教育活動にみる課題検討については、平成25年度に玉川大学を訪問し、施設の視察及び学生の実践する美術プロジェクトを指導されていた芸術学部ビジュアル・アーツ学科教員にインタビューを行い、今後の美術プログラムの課題を検討した。

(2) 社会とかわりながら学ぶ美術教育プログラムの開発と実践については、平成24年度に江戸時代の天神祭りや大阪府八尾市でみられる民俗行事「『つくりもん』の立体制作活動」と、平成24年度から平成26年度にかけて毎年「シャッターアート制作活動」を実践した。

『つくりもん』(日常生活道具や野菜類などで人形や動物など趣向の物を造る、祭礼時のお飾りの一種)は、近代以前は大阪で盛んに行われていたが、現在、大阪では八尾市八尾木地区で継承されているのみである。「『つくりもん』の立体制作活動」(写真1)については、江戸時代の天神祭りの『つくりもん』を再現展示している大阪市立住まいのミュージアムを会場として行った。



写真1 つくりもん制作風景

「シャッターアート制作活動」は、地域と連携しつつ商店のシャッターに絵を描く活動であり、商店街連合会等から協力を得て、大阪府柏原市 JR 柏原駅周辺商店街を活動フィールドとしている。学生と地域の方との交流の1つとして、制作途中(写真2)には、道行く方から、頻りに声をかけていただくことができた。本研究期間である平成24年度～平成26年度の間、絵を描いたシャッターの数は6店舗である。平成20年度からの本研究の予備段階を含めると合計14店舗となる。シャッターアートの完成写真として、14店舗の中から3店舗を抜粋し掲載する。予備的研究期間の平成23年度にA薬局(写真3)、本研究期間の平成25年度にN宝飾店(写真4)、平成26年度にT書店(写真5)にて活動を行なった。

塗装作業の特徴として、単一色にて下地塗装のみ塗装業者に発注をした。それには、任意の背景色と同色にて下地塗装を行い、現場作業時間の短縮と、塗装面の清掃、経年変化による剥離の可能性を軽減する目的がある。活動する美術専攻所属学生は通常、絵画のキャンパスや紙等、塗装に適した素材に塗料を塗布する修練をしている。シャッターの場合は、それらに比べ特殊であり、状態も店舗によって様々であるため、学生の技術面を業者の協力を得て、補う必要があった。時に塗装業者の方から、壁面塗装の段取りや留意点について学生が助言を頂く場面もあり、地域社会における交流の1つにもなった。

また、学生による本塗装における塗料の定

着を、より強固にするため、下地塗装の表面に塵などの遮蔽物が多く付着する前に、本塗装を開始する必要がある。そのため、下地塗装と学生による本塗装を開始するまでの間隔を一定期間以上あけない必要があり、塗装開始時期について、業者と店舗、教員との綿密な打ち合わせが必要であった。塗装の剥離は店舗の印象に密接に関わるため、現在営業中の店舗に対して重要な配慮である

シャッターアート活動に要する期間と進行は、次のようになる。

- ・5月～6月:参加希望学生募集。概要説明。
- ・7月:シャッターの下見と店主ヒアリング。
- ・8月～9月:デザイン案の作成。教員のデザイン案に対する指導。店主へのプレゼンテーション。店主の了承が得られるまで、デザイン案の修正、教員による指導、店主へのプレゼンテーションを繰り返す。
- ・10月～12月:最終プランの決定。下地塗装。調色作業。アンケート調査。現場塗装作業。塗装完成。
- ・12月～1月:成果報告パンフレットの作成。当該年度の活動終了。

学生による現場塗装作業は、4～5日ほどで行なわれた。実作業の日数は数日であるが、塗装をする店舗は営業をしているため、店舗の休日やシャッターを閉められる時間帯、及び塗装可能な天候時のみ制作可能であった。そのため、週に1日の作業を4回行なうなど、塗装期間は数週間必要であった。

以上のようにシャッターアート活動は、毎年8ヶ月ほどの活動期間を要し、それを毎年度繰り返した。活動は毎日行なわれないが、学生にとっては、長期間に渡って携わる活動である。



写真2 シャッターアート制作風景





写真3 A薬局



写真4 N宝飾店



写真5 T書店

実践活動を行う学生は、研究代表者の研究室などに所属する美術専攻学生を中心に有志を募り、説明会を経て、活動した。有志は毎年ごとに改めて参加を募った。参加学生の回生は、学部2回生から大学院1回生までと、幅広いものとなった。3年間の本研究期間を通して26名の学生が活動した。

(3) 実践した学生参加型美術教育プログラムの検証については、その検証の一環として「シャッターアート制作活動」について、学生とその活動に触れる地域住民を対象に、平成24年度及び平成26年度にアンケート調査を行った。さらに平成26年度に、過去7年間にわたりシャッターアートを描いた店舗

の店主に対してヒアリング調査を実施した。

アンケート調査は制作途中に店舗前を通る方に対して行なった。平成24年度は40名、平成26年度は31名の方から回答が得られた。「大阪教育大学の学生がシャッターアートを描いたことを知っていましたか」という質問には、知っていたという返答が、平成24年度は47.1%、平成26年度は58.1%であった。「大学生のシャッターアート活動は、商店街などの街のにぎわいづくりに役立つと思いますか」という質問には、平成24年度は「とてもそう思う」64.7%、「まあそう思う」29.4%、平成26年度は「とてもそう思う」58.1%、「まあそう思う」35.5%であった。

平成26年度のアンケート結果のうち、図1は「商店街・駅前店舗の利用度とシャッターアート活動がにぎわいづくりに役立つと思うかの関係性」、図2は「商店街・駅前店舗の利用度とシャッターアート活動をまた見に来たいと思うかの関係性」を示している。図1から、商店街をよく利用する回答者の9割り及び、たまに利用する回答者の4割り近くから、大学生のシャッターアート活動は、商店街などの街のにぎわいづくりに、とても役立つと思うとの回答が読み取れた。一方、まったく利用しないという回答者からは、半数の方が、あまりそう思わない、分からないという関心の低さが伺えた。図2から、シャッターアートが増えるとまた見に来たいかという質問には、「よく利用する」回答者の7割り、「たまに利用する」回答者の4割りから、「とてもそう思う」という結果が得られ、シャッターアートに対する期待感が伺えた。アンケート結果からは、地域の方からの認識度と期待感は、高いことが読み取れた。

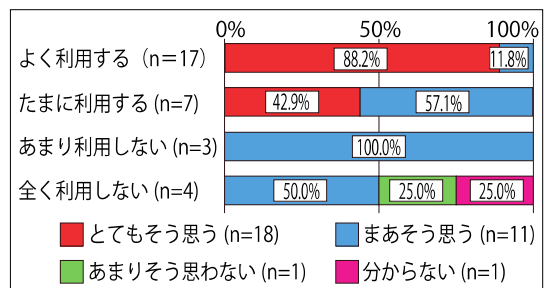


図1 商店街・駅前店舗の利用度とシャッターアート活動がにぎわいづくりに役立つと思うかの関係性

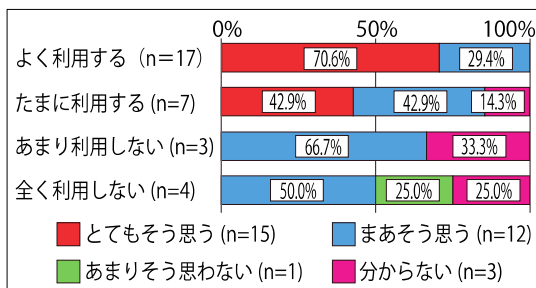


図2 商店街・駅前店舗の利用度とシャッターアート活動をまた見に来たいと思うかの関係性

平成 26 年 10 月から 12 月にかけて、シャッターアートを描いた店舗の店主に対してヒアリング調査を実施した。調査を実施できたのは調査対象店舗 12 軒のうち 10 軒である。「目に留まって印象に残る」や、「店の目印になり、場所が分かりやすい」「シャッターアートによって業種がわかる」といった宣伝効果について評価の高い意見が 7 軒からあった。一方「シャッターを閉めているときにしか見られないのが残念」との意見もあった。シャッターアート活動の継続については、「継続されるのを知っていたら、他の店の絵との統一感を出せばよかった」「絵でストーリーを作れば面白い」といった意見から、「店それぞれ個性を出すために違う絵にしたほうがよい」「店の業種に合った絵にすべき」といった相反する意見も伺えた。「最近シャッターアート希望の人が増えている」という意見もあった。アンケート調査結果や、店主のヒアリングからは、認識度と期待度が高くあり、限定的な地域ではあるが、地域社会に根ざした活動となりつつあることが伺えた。

(4) 「シャッターアート制作活動」の研究成果については、平成 24 年度から平成 26 年度にかけて毎年、活動成果報告パンフレットにまとめ、最終成果として平成 26 年度は、活動を開始した平成 20 年度から平成 26 年度までの活動を総括したパンフレットを作成し、地域に発信した。パンフレットには、シャッターアートの場所を示した地図(図 3)、下書きからプラン完成までの変遷や進め方、塗装制作風景、完成写真、アンケート調査結果、店舗や参加学生のコメント等を記載した。



図3 シャッターアートマップ

(5) 平成 24 年度に「地域活動交流会まちカツ in Yao 2013」及び「附属学校園教員と大学教員との研究交流会」に、平成 25 年度に「地域交流会まちカツ 2014」にて、シャッターアート活動について、作成したパンフレットを提示し、プランニングの段取りや、制作方法、それらの課題、店舗や地域の方との交流について学生や教員が発表した。

また、大阪府柏原市広報誌「広報かしわら」に活動参加学生がインタビューを受け、シャッターアート活動が掲載された。

(6) 学生が地域社会(まち)に出て行う実践教育は、学生においては、リアルタイムで作品に対する社会の反応が得られることと、表現活動を通して地域社会と交流することができた。それらは、通常の大学授業では得難い経験となった。学生による活動は、局所的だが、地域の方々に認識され、学生の取り組みとして理解され始めており、地域社会への貢献活動の 1 つとなることができた。そのことは、シャッターアート活動について、継続的に地域の方から積極的な要望があることや、アンケート結果から推し測ることができ、本研究費による研究期間は、一旦終了となるが、この学生による実践活動自体は、大学の通常授業との融合を模索しつつ継続されている。これらのことから本研究における取り組みからは、社会的意義の高い成果が得られたと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔その他〕

### (1) 成果報告パンフレットの作成

五明 真、碓田 智子、他 7 名  
まちの彩り・景観まちづくりプロジェクト  
2012、2013 年、7 ページ

五明 真、碓田 智子、他 5 名  
まちの彩り・景観まちづくりプロジェクト  
2013、2014 年、7 ページ

五明 真、碓田 智子、他 9 名  
まちの彩り・景観まちづくりプロジェクト  
2008-2014 ～学生参加型活動の記録～、  
2015 年、53 ページ

( 2 ) 交流会及び学生による口頭発表

「附属学校園教員と大学教員との研究交流会」にて教員によるポスターセッション。  
2013年3月1日、主催：大阪教育大学、会場：  
大阪教育大学

「地域活動交流会まちカツ in Yao 2013」  
にて活動参加学生による口頭発表。2013年3  
月24日、主催：大阪府八尾土木事務所、H21  
地域力アップフォーラム実行委員会、会場：  
大阪経済法科大学

「地域交流会まちカツ2014」にて活動参加  
学生による口頭発表。2014年3月23日、主  
催：大阪府、会場：大阪商業大学

( 3 ) メディア掲載

大阪府柏原市広報誌「広報かしわら」2013年  
3月号に、シャッターアート活動が取材、掲  
載される。

6 . 研究組織

( 1 ) 研究代表者

五明 真 (GOMYO, Makoto)  
大阪教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号：80362747

( 2 ) 研究分担者

碓田 智子 (USUDA, Tomoko)  
大阪教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：70273000